

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 21 日現在

機関番号：34420

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380811

研究課題名(和文)聴覚障害者への相談支援における文化モデルアプローチの研究

研究課題名(英文) Research Study on the Cultural Model Approach of Social Work with Deaf and Hard of Hearing People

研究代表者

原 順子 (Hara, Junko)

四天王寺大学・人文社会学部・教授

研究者番号：60309359

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：聴覚障害者の生活上の諸問題に関わる相談支援(聴覚障害ソーシャルワーク)において、マイノリティである聴覚障害者をポジティブに且つストレングス視点で介入するには、ろう文化視点を基盤とした「文化モデルアプローチ」が有効であることを実証するために調査研究をおこなった。具体的な研究成果は、以下の3点である。

1. 聴覚障害者の独自の文化であるろう文化の理論的構築と、ろう文化視点に基づく文化モデルアプローチの有効性 2. 文化モデルアプローチによる介入は、聴覚障害者へのストレングス視点が容易であること 3. ネガティブに捉える傾向のある「聴覚障害者の特性」との相違と、文化モデルアプローチの理論的枠組みの生成

研究成果の概要(英文)：In order to build expertise in offering support to Deaf and hard of hearing to examine the many problems that they encounter in daily life I conducted research and studied along with social workers. The purpose of the study is to understand the “cultural model approach,” which is useful to gauge social workers’ the strength perspective of their intervention. The results are as follows.

1. A theoretical framework for Deaf culture and a “cultural model approach, which was effective,” was created based on the same. 2. The “cultural model approach” is an easy intervention for social workers having the strength perspective to understand Deaf and hard of hearing people. 3. The clarification in the differences the “cultural model approach” and their characteristics and creation of a theoretical framework for this approach was done.

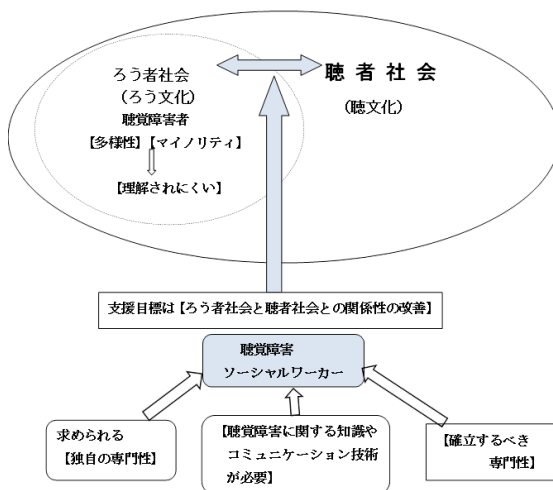
研究分野：障害者ソーシャルワーク

キーワード：文化モデルアプローチ 聴覚障害者 ろう文化 相談支援 障害者ソーシャルワーク ストレングス視点

1. 研究開始当初の背景

聴覚障害者をクライアントとする相談支援を「聴覚障害ソーシャルワーク」として位置づけ、その専門性構築に関する研究を科研により実施し、大きく2点の研究成果を導き出した。(2010~2012年度独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究C(研究代表者:原 順子)課題番号 22530650「聴覚障害ソーシャルワークの専門性構築に関する研究」)

1つ目の研究成果は、図1に示す「聴覚障害者へのソーシャルワーク実践の枠組み」を、聴覚障害者を対象に相談支援活動をおこなっているソーシャルワーカー(=聴覚障害ソーシャルワーカー)へのインタビュー調査の質的研究により、専門性構築をおこなった。



(図1) 聴覚障害者へのソーシャルワークの理論的枠組み

聴覚障害者の実態は、【多様性】をもつ【マイノリティ】であり、且つその障害の実態が【理解されにくい】障害であることが明らかになった。聞こえる多数の人々で構成される聴者社会の中で、さまざまな生きづらさを抱えている聴覚障害者を対象に相談支援をおこなう専門職者である聴覚障害ソーシャルワーカーの支援目標は、【ろう者社会と聴者社会との関係性の改善】であり、そこには【聴覚障害に関する知識やコミュニケーション技術が必要】であり、その【独自の専門性】が求められるという実践枠組みを構築した。

2つ目の研究成果は、聴覚障害ソーシャルワーカーの7つのコンピテンスを生成したことである。具体的には、多様な存在である聴覚障害者の理解 クライアントに応じたコミュニケーション・スキル 幅広い相談内容への対応力 聴覚障害者のための制度に関する知識 聴覚障害者のための社会資源の知識 IT機器活用術 聴覚障害者に関するアドボカシーである。

本研究の重要なキーワードである「ろう文化」は、聴覚障害者独自の文化として近年指摘されることが多くなってきている概念であり(木村 2000, 2007, 2009, 亀井 2006,

Ladd2003=森 2007, Lane1999=長瀬 2007, 原 2008, 澁谷 2009) 海外の聴覚障害者関係の文献にも、ろう文化(Deaf Culture)の記述は必ずといってよいほど見受けられる。故に、聴覚障害ソーシャルワークにおいても、ろう文化に着目した「文化モデルアプローチ」が有効であるとの仮を検証することにした。

2. 研究の目的

本研究では、聴覚障害者を対象に相談支援活動をおこなうソーシャルワーカーの支援モデルとして、「文化モデルアプローチ」の有効性を明確にし、且つ理論的構築することを目的とする。聴覚障害者をクライアントとして支援する場合には、聴者がクライアントである場合とは異なる独自の「文化モデルアプローチ」が有効であり、このアプローチは聴覚障害者のろう文化を基盤としたストレングス視点に基づくアプローチであると考える。

具体的には、以下の3点を論考・検証し、聴覚障害ソーシャルワークにおける文化モデルアプローチの重要性を明らかにする。

(1) 聴覚障害者の独自の文化であるろう文化の理論的構築と、ろう文化視点に基づく「文化モデルアプローチ」の有効性について明確化する。

(2) 「文化モデルアプローチ」による介入で、聴覚障害者へのストレングス視点が容易であることを実証する。

(3) 「文化モデルアプローチ」による障害理解と従来から指摘されている「聴覚障害者の特性」との相違を明らかにし、文化モデルアプローチの理論的構築をおこなう。

3. 研究の方法

研究の目的(1)については、主として海外の先行研究から、ろう文化の実態とろう文化視点に基づく「文化モデルアプローチ」が聴覚障害者にとって有効なアプローチであることを明らかにした。

研究の目的(2)については、聴覚障害者を対象に相談支援をおこなっている相談員や聴覚障害者と関わる業務に携わっている研究協力者(37名)を対象に、文化モデルアプローチにより介入することで、聴覚障害者への理解がネガティブからポジティブに転換できることをワークショップをおこない検証した。

具体的には、「聴覚障害者についてよく知らない聴者に対して、どのように説明するか」について記述してもらい、その中から聴覚障害者の文化モデルに基づく内容を抽出した【ワークショップ1】。次に、文化モデルアプローチについて研究代表者が説明をおこなった後に、ネガティブな記述内容をポジティブな視点に転換する【ワークショップ2】をおこなった。その結果、具体的な文化モデルアプローチの内容を明らかにすることが

でき、且つ、文化モデルアプローチは聴覚障害者についての障害者観をポジティブに捉えることが可能となり、聴覚障害者のストレスをより強固にアセスメントできることが考察できた。

研究協力者を対象に研究代表者がおこなった講演のうち、「文化モデルアプローチ」に関する内容の概略を以下に記す。

まず、障害者観が時代と共に変遷してきたことを説明し、その変遷は聴覚障害者も同様であり、医学の進歩により聴覚病理の認知と発見が可能になったことで、「聾」への医療的試みが行われるようになったことを説明した。例えば、感音性難聴の治療や人工内耳の埋込手術である。

次に障害学でのモデル理論を紹介し、障害の医学モデル・欠損モデル・個人モデルから、障害の社会モデルや文化モデルが登場したことを説明した。聴覚障害者に関してモデル理論で説明し、医療的試みをおこなうのは疾病モデル、病理モデル、医学モデル、欠損モデル等と呼ばれるものであり、それに対して文化モデルは、デフコミュニティのメンバーが、共有の歴史、認識傾向、共通の習慣、共通の感覚、日本手話で構成される「ろう文化」をもつものであることを紹介した。これらの障害者観の変遷は、病理的視点から文化的視点に基づくものへの変遷であることを説明した。

さらに、聴覚障害者には「ろう文化」という独自のアイデンティティをもつコミュニティが存在することで、聴覚障害者を対象とする聴覚障害ソーシャルワークにおいても、多数派である聴者の聴文化に対して、少数派である聴覚障害者の「ろう文化」に関する視点が不可欠であり、それを基盤とする支援として「文化モデルアプローチ」が構築される(原 2015)と説明した。文化モデルアプローチは有効な支援アプローチであり、クライアントをストレス視点で理解することが可能となる。例えば、聴覚障害の特性を説明する時に、医学モデル・欠損モデルで説明すると、「聞こえないから説明してあげてください。」「聴覚障害者は ができない人」とネガティブな説明になるが、文化モデルで説明すると、「筆談すれば OK です。」「聞こえない人の文化と聞こえる人の文化に違いがあります。」とポジティブになることを説明した。

以上のように文化モデルアプローチを説明した後、【ワークショップ 2】として文化モデルアプローチによる記述の変更をおこない、ネガティブな視点からポジティブな視点に転換するには文化モデルアプローチが有効であることを考察した。そして、「文化モデルアプローチ」による介入で、ストレス視点の介入が容易となることを理論的に明確化した。

研究の目的(3)については、13名の聴覚障害ソーシャルワーカー(聴覚障害者 9人、

聴者 4人)を研究協力者として、「ろう文化に関する質問」「聴覚障害者の理解に関する質問」に関する内容についてインタビュー調査を実施し、聴覚障害ソーシャルワークにおける「ろう文化」の捉え方やその有り様を明確にした。

なお、インタビュー調査においては、調査研究における倫理的配慮として、研究協力者のプライバシーの保護、およびインタビュー時に話題となる事例のクライアントに関する個人情報の保護、そして調査結果を報告する際には、個人の特定ができないようにすることを、調査依頼時には文書で説明し、またインタビュー開始時には再度説明し、承諾を得てからインタビューを開始した。

また、手話をコミュニケーション手段とする研究協力者の場合は、手話をビデオカメラで撮影し、手話通訳者による読み取り通訳の音声をICレコーダーに録音すること、聴者の研究協力者にはICレコーダーに録音することを、インタビュー開始時に許可を得てから録画・録音をおこなった。

音声情報と手話を撮影した動画ならびに逐語化したデータの保管には厳重に注意した。また、本研究は、研究代表者が所属する勤務先である四天王寺大学の研究倫理審査委員会に審査を申請し承認を得ている。

4. 研究成果

以上の3つの研究目的に関して、以下の研究成果があった。

(1) 聴覚障害者の独自の文化であるろう文化の理論的構築と、ろう文化視点に基づく文化モデルアプローチの有効性について

「文化」とは、知識、信仰、芸術、法律、慣習および人間が社会の一員として獲得したすべての能力と習慣を含む複合的全体である(日本文化人類学会 2009)。そして、文化とは広い概念であり、比較の文脈が定まると文化に関する議論が可能となるもの(山本 2015)という観点から、ろう文化は聴者の文化である聴文化との比較においてとらえることが可能な事象と考える。その中でも、ろう文化には手話という独自のコミュニケーション言語がある故に、純粋に文化を語り得るものである。

アメリカにおいてろう文化が最初に登場したのは、Stokoe et al.(1965)の著作で、普及したのは“Deaf in America: Voices from a Culture”(Padden & Humphries 1988)が出版されてからという。イギリスにおいてろう文化を明確に言及したのは 1981 年の Brien の論考であるという。

障害の社会モデルが、従前の医学モデルや個人モデルへの否定から登場したように、ろう文化についても、従来の聴覚障害者への医学モデルや病理モデルから転じてきている。

ろう文化視点に基づく「文化モデルアプロ

ーチ」の有効性については、聴覚障害者を医学モデルや病理モデルで捉えるのではなく、手話や視覚重視といった聴覚障害者にとって重要なろう文化を基盤とするものを文化モデルアプローチと捉えているが、海外の先行研究では、教育、メンタルヘルス、カウンセリング領域で文化モデルアプローチと類似している以下の研究がみられた。

教育分野では、聴覚障害児へのろう文化への早期介入の必要性を論じた文化言語モデル (Cultural-linguistic Model of Deafness) (Young1999) と、ろう文化への良き指導者としてデフ・メンター (Deaf Mentor) の重要性 (Sass-Lehrer2010=2015) を論じたものがある。メンタルヘルス領域では、Glickman がろう文化を理解した治療環境の重視を積極的文化アプローチ (Cultural Affirmative Approach) (Glickman2003) として提唱し、聴覚障害者への患者には手話でコミュニケーションが可能な医師や看護師を配置し、聴覚障害者のろう文化に基づく対応が可能な状態にしなければならないと主張している。カウンセリング領域では、ろう者を対象とするカウンセラーはろう文化を一番考慮すべき事柄として捉えるべきであるとの指摘があった (Peters 2007)。

以上のように、聴覚障害者に関わる関連領域における海外の先行研究では、ろう文化を重視した視点がすでに論じられていることが明らかとなった。

(2) 「文化モデルアプローチ」による介入で、聴覚障害者へのストレングス視点が容易であることについて

聴覚障害者への相談支援をおこなっている職員 (相談員のみならず聴覚障害者と関わる職種も含む) を対象に、聴覚障害者の障害者観を調査し、ろう文化についての認識、聴覚障害者に対してのポジティブな視点のあり方を考察した。

文化モデルアプローチを説明する前に、既にポジティブな記述があったものもあり【ワークショップ1】、これらの記述をしていたのは研究協力者 37 人中 18 人 (1 項目でも記述があった者を含む) で、全体の 48.6% であった。

「聴覚障害者についてよく知らない聴者への説明」に関する記述内容を分析すると、1) 「ろう文化」についての記述があるもの 2) 内容が「ろう文化」であるもの 3) その他 の 3 分類となり、2) についてはさらに 視覚重視の文化の内容、手話の記述、「ろう文化」の生活様式に関する記述に分けることができた。以下、一部分であるが紹介する。

1) ろう文化についての記述

- ・ろう文化であることについて説明する。
- ・ろう者特有かつ独自の文化がある。

- ・ろう者特有のろう文化を持っている聴覚障害者は、健聴者とは異なる文化を持っている。
- ・ろう者独特の文化をもっている人もいる。生活習慣も様々。
- ・聞こえる人と聞こえない人は、同じ日本人でも文化が異なる。
- ・手話の世界では「にこっと笑って手を挙げる」ことはきちんとした挨拶。手話の文化。
- ・健聴者の文化と違う (礼儀などが)。
- ・ろう文化と健聴者の文化の違い (挨拶の仕方など)。
- ・気遣いやマナーの面で、聴者社会と異なる点があるため、聴覚障害者に対する文化の理解が必要。

2) 「文化のズレ」だと説明する。

2) 内容がろう文化である記述

- 視覚重視の文化の内容
- ・目で見て観察する力がすごい。
- ・視覚的に優れている人が多い。
- ・表情が大切。視線は下げない。見て確認する。
- ・判断する時は、視覚的情報が全て。
- ・地図を書くのが上手な人が多い。
- ・観察力が鋭い。よく見ている。

・手話にこだわらなくても、身振り、空文字、筆談、表情で OK .

- ・観察力がするどい。
- ・見てわかる情報が大事。
- ・目から情報を得ることが多い。目で見てわかる情報は良く見ている。メールやインターネット、PC、スマホ、タブレットなど得意である。

手話についての記述

- ・手話と日本語は別の言語である。
- ・手話通訳を使うことで聴者と充分にやりとりができる。
- ・手話でコミュニケーションする方です。ろう文化の生活様式についての記述
- ・手を挙げるのがろう者の「挨拶」。ろう者では一般的な挨拶。
- ・声だと気づかないので、肩を叩いたり、視界に入ったりして呼びかける。
- ・聞こえない人同士の挨拶は、手を挙げることが多い。
- ・表情や手の動きで挨拶する。
- ・第一言語が手話の聴覚障害者は、書記日本語は第二言語である。

3) その他

- ・想像力が豊か。良い意味でも、悪い意味でも。
- ・耳が聞こえなくてもできることはたくさんある。
- ・×白黒がハッキリしている。
- ・きちんと説明をすれば、理解できる。(簡潔な方法で)
- ・聴覚障害者の特性を説明する。
- ・ろう者はろう学校単位でコミュニティが作られてきた。

次に、文化モデルアプローチに関する説明をした後に、研究協力者が【ワークショップ1】で記述したネガティブな内容を、【ワークショップ2】でポジティブな内容に書き直したものを以下に示す。

研究協力者 37 人が記述したポストイットの総数は 328 枚で、1 人平均 8.9 枚であった（時間制限あり）。ネガティブからポジティブに転換できた記述は 35 枚であった。この 35 枚の記述は明確に転換例が書かれているものだけを抽出したため少ない数となっている。そのうちの一部を以下に示す。

<ネガティブな記述> ➡ <ポジティブな記述>

- ・コミュニケーションがとれないため、周りの人と人間関係をうまく築けない人がある。➡ 周りとのコミュニケーション手段が異なるため、周りの人と人間関係がうまく築けない人があるが、周りの人が手話ができたら、コミュニケーションがスムーズにできる。
- ・長い文章の読み書きは苦手な人が多い。➡ 短い文章ならわかる。手話では十分に話ることができる。
- ・日本語が苦手である。➡ 手話が第一言語である。
- ・筆談ではわかりにくい人がある。➡ 日本語と手話は別の言語だから、筆談ではわかりにくい人があるが、手話ならばわかる。
- ・健聴者文化が身につけていない。➡ ろう文化の中で育っているのだから、ろう文化は獲得できている。
- ・長い間積み重ねられる情報が、聞こえる人と比べて非常に少ない。➡ ろうの社会や当事者団体などでの手話コミュニケーションから、いろいろな情報は積み重ねられて、そこからマナーも身につけてくる。

今回のワークショップでの結果は、ろう文化を基盤とした文化モデルアプローチで聴覚障害者のクライアントを捉えることは、クライアントへのストレングス視点でのアセスメントにつながり、有効なアプローチであることが実証できた。また、聴覚障害者をポジティブに捉えることにもなり、障害者観の転換にもなりえることが示唆された。

(3) 「文化モデルアプローチ」による障害理解と従来から指摘されている「聴覚障害者の特性」との相違と、文化モデルアプローチの理論的構築について

インタビュー面接時の録画・録音した音声データを逐語録にし、その分析方法は質的データ分析法（佐藤 2008）を参考に、実際の分析作業は質的データ分析（QDA）ソフトの MAXQDA12 を使用しておこなった。

調査分析により、3 つのカテゴリー、6 つのサブカテゴリー、25 の概念が抽出された。3 つのカテゴリーは、A：ろう文化、B：聴覚障害者の特性、C：マイノリティである。

各カテゴリー別にサブカテゴリーと概念を以下に示す。

<カテゴリーA：ろう文化>

サブカテゴリー：ろう文化の存在

概念：文化の違い 手話と音声言語の違い ろう文化の特徴 ろう者に通じる手話力 相手に応じたコミュニケーション手段

サブカテゴリー：ろう文化の理解

概念：ろう文化批判 ろう者社会の価値観で安心 ネガティブ理解をしない ろう者理解がある環境はよい ろう者同士がよい 同じ文化を共有しているソーシャルワーカーはよい

<カテゴリーB：聴覚障害者の特性>

サブカテゴリー：聴覚障害者の特性はネガティブ

概念：こだわりが強い 分かったふり 相手にあわす習性 被害妄想をもちやすい 意思疎通の難しさ 生活情報量が少ない 聴者社会のルールがわからない

サブカテゴリー：聴覚障害者の特性の理解が必要

概念：分かったどうか確認が必要 聴者社会の価値観を押し付けない ①ろう者特性を聴者は学ぶ必要あり ②聴覚障害者を理解するのは難しい

<カテゴリーC：マイノリティ>

サブカテゴリー：マイノリティ故の困難性

概念：③聴者が優位 ④手話を使っては駄目 ⑤聴者社会での生きづらさ ⑥ろう者社会への理解不足

サブカテゴリー：聴者社会での孤立

概念：⑦家族内での孤立 ⑧家族内で言葉が通じない

従来から、聴覚障害ソーシャルワークにおいて「聴覚障害者の特性」を理解することの重要性はよく指摘されることであるが、今回の調査結果から、「聴覚障害者の特性」（カテゴリーB）はネガティブな概念が多く生成された。それに対して、文化モデルアプローチの理論的な基盤であるろう文化（カテゴリーA）に関する概念はポジティブな内容であった。クライアントをアセスメントする際に、ネガティブな視点の場合は医学モデル、病理モデルでのアセスメントとなりやすい。それに対して、文化モデルアプローチでの場合は、クライアントをポジティブに捉えることができ、クライアントのストレングス視点にもなり有効なアプローチであると考えられる。

以上の3つの研究成果により、聴覚障害ソーシャルワークにおけるろう文化を基盤とした「文化モデルアプローチ」は、マイノリティである聴覚障害者をポジティブに且つストレングス視点で介入することができ、有効なアプローチであるということが実証できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

原 順子「聴覚障害者へのソーシャルワーク - 求められる専門知識と技術 - 」日本手話通訳士協会・日本手話通訳学会研究紀要、査読無、第11巻、2014. 3 - 26 .

原 順子「聴覚障害者の生活を支えるために必要な視点」月刊福祉、査読無、2016. 30-33 .

原 順子「聴覚障害者への相談支援における「文化モデルアプローチの一考察 - 具体例から考察する文化モデル視点への転換 - 」四天王寺大学紀要、査読有、第62号、2016. 265-275.

<http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/wp/wp-content/uploads/2016/10/kiyou62-15.pdf>

原 順子「聴覚障害ソーシャルワークにおけるろう文化視点と文化モデルアプローチの有効性に関する考察」四天王寺大学大学院研究論集、査読有、第11号、2017. 39-51 .

〔図書〕(計1件)

原 順子、明石書店『聴覚障害者へのソーシャルワーク - 専門性の構築をめざして - 』2015. 197頁.

〔その他〕

ホームページ等

四天王寺大学ホームページ 平成28年度採択課題 研究概要

http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/guide/28kaken_outline01.php#03

四天王寺大学ホームページ 教員情報

http://www.shitennoji.ac.jp/ibu/docs/guide/kaken/27/hara_j.pdf

6. 研究組織

(1)研究代表者

原 順子 (HARA, Junko)

四天王寺大学・人文社会学部人間福祉学科・教授

研究者番号：60309359